



看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2011-07-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北島, 洋子, 細田, 泰子, 星, 和美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005558

原 著

看護系大学生の社会人基礎力の 構成要素と属性による相違の検討

Components of undergraduate nursing students' basic skills for being a member of society and an investigation into their differences by attribute

北島洋子¹⁾・細田泰子²⁾・星 和美²⁾

Yoko KITAJIMA¹⁾, Yasuko HOSODA²⁾, Kazumi HOSHI²⁾

キーワード：看護系大学生，社会人基礎力，構造方程式モデリング，多母集団同時分析
Keywords: Undergraduate nursing students, Basic skills for being a member of society ,
Structural equation modeling, Multi-population simultaneous analysis

Abstract

The purpose of this study was to check the component factors of nursing undergraduates' basic skills for being a member of society, and to investigate differences in their attributes. In the concept defined by the Japanese Ministry of Economy, Trade and Industry (METI), basic skills for being a member of society are made up of 3 categories and 12 skill factors. A survey consisting of 36 questions was carried out with 1043 participants, who were 1st and 4th year students at 8 nursing colleges. The investigation into the component factors used a confirmatory factor analysis and a multi-population simultaneous analysis by means of structural equation modeling, and a Mann-Whitney U-test was used to investigate the differences in attributes.

Components of basic skills for being a member of society were brought together into a single concept and expressed based on the METI's definition. In the multi-population simultaneous analysis by year of study and by sex, it was shown that this model structure is applicable to differences in population by year of study and by sex. Total score of basic skills for being a member of society revealed significantly higher values in those with pro-fessional experience than those without any, in 4th year students than in 1st year students, and in male than in female students by the Mann-Whitney U test. This indicated the possibility of improving basic skills for being a member of society in basic nursing training.

要 旨

本研究の目的は看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し，属性による相違について検討することである。社会人基礎力は経済産業省により3分類12能力要素の構成とされている。看護系大学8施設の1年次と4年次の学生1043名を対象に，社会人基礎力を問う36項目の質問紙調査を実施した。構成要素の検討は構造方程式モデリングによる確認的因子分析と多母集団同時分析，属性による相違の検討はMann-WhitneyのU検定を用いた。社会人基礎力の構成要素は経済産業省の定義に基づく構造のまとまりある一つの概念であることが示された。学年別と性別の多母集団同時分析において，このモデル構成は学年および性別による母集団の相違に対応していることが示された。社会人基礎力合計得点はMann-WhitneyのU検定において，社会人未経験者より経験者，1年次生より4年次生，女子学生より男子学生が有意に高値を示した。看護学基礎教育における社会人基礎力の伸長の可能性が示唆される。

受付日：2010年10月7日 受理日：2010年12月9日

1) 兵庫県立大学看護学部

2) 大阪府立大学看護学部

緒言

新卒看護師を取り巻く医療環境の変化は著しく、社会のニーズに応える質の高い看護の提供のために、看護実践能力の向上を図ることは看護学基礎教育および新人看護師教育における重要な課題となっている。新卒看護師は「想定外・急変時・未経験・標準的でないケアへの対応」、「受け持ち患者数の多さ」、「患者・家族とのコミュニケーションの困難」、「職場と自分の看護観の相違」、「他職種との協働におけるとまどい」、「先輩看護師との人間関係」等のリアリティショックを経験している（佐居ら、2007）。また、卒後3カ月時の新人看護師の7割は離職願望を抱いており（水田ら、2004）、学生から職業人への立場の移行の困難さがうかがえる。

リアリティショックに関しては看護学生から病院勤務の看護師への移行に際し、組織社会化と専門職社会化の双方が求められることが大きく影響している（勝原ら、2005）。組織社会化とは職場への参入者が組織の一員となるために、組織の規範・価値・行動様式を受け入れ職務遂行に必要な技能を習得し、組織に適応していく過程をいう（高橋、1993）。専門職社会化とは、個々の職業アイデンティティの感覚が発達する間の、専門職としての態度、価値観、信念が内在化されるプロセスをいう（Claytonら、1989）。

一方、近年子どもの生育の基盤となる生活環境は著しく変化し、家庭や地域の教育力の低下（内閣府、2007）や、子どもの生活体験の減少（軸丸ら、2006）が報告されている。大学への進学希望者は全員入学できる時代となり、社会人育成のための人格教育や生活指導は、大学にとって次第に重要な役割となってきている（神谷ら、2000）。このような社会背景の中、学生生活を終え実社会へ出ていく近年の若者は、職場で求められる能力を獲得しないまま社会人となるため、スムーズな職場適応が困難な状況にある（社会人基礎力に関する研究会、2006）。

経済産業省では2006年、「社会人基礎力に関する研究会」を設置し、職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力を「社会人基礎力」と定義し、企業と学生と学校の関係者が共通言語として用いる概念として位置付け、その育成・評価のプログラム事業を展開している（社会人基礎力に関する研究会、2006）。他にも、「学士力」として、多文化理解、コミュニケーション・スキル、論理的思考

力、問題解決力、市民の社会的責任などの能力要素を提起し、学士課程教育における21世紀型市民の育成を目指す動きもみられている（中央教育審議会、2008）。同様に、社会の変化に伴ってその要請に応え得る人材を育成しようとする動きは国際的にもみられており、OECD（Organization for Economic Co-operation and Development）は21世紀を生きる市民に求められる個人及び社会のレベルで高い価値をもつ結果に貢献する能力として、自律的に行動する能力、社会的に異質な集団における交流能力、社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力からなるキー・コンピテンシーを定義している（Rychenら、2003）。

看護学基礎教育においても大学卒業者の看護実践能力の向上はもとより、自己の確立、自己洞察、他者との関係性の構築能力等を身につけることの重要性が述べられている（看護学教育の在り方に関する検討会、2004）。社会人として基本的に求められる能力の育成は時代の教育的ニーズに応えるものであり、新卒看護師の組織社会化、職場適応の促進、リアリティショックの軽減への寄与が期待できるものと考えられる。

社会人基礎力は、アクション、シンキング、チームワークの3分類と、その下位概念である主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力の12の能力要素から構成される。これらの能力要素は看護学基礎教育において必要とされている自己の確立、自己洞察、他者との関係性の構築能力とも共通するものがある。

社会人基礎力は職場や地域で活躍する上で必要と考えられる能力の一部であり、「基礎学力」、「専門知識」、「人間性、基本的な生活習慣」と重複する部分を有し、相互作用により様々な体験を通して循環的に成長するものと考えられている。社会人基礎力の育成には課題解決型学習（Project Based Learning：PBL）、産学共同研究、実践型インターンシップ、キャリア教育等の活用が提案されている（経済産業省編著、2008）。

社会人基礎力に関する研究はインターンシップやPBLの実践報告が主であり（藤井ら、2010；富樫ら、2008）、構成要素を明らかにしたものは見当たらず、看護学基礎教育における社会人基礎力育成の先行研究も確認されていない。

看護学基礎教育は臨地実習がカリキュラムの多くの部分を占める（看護行政研究会、2010）。学生でありながら実践の場で学ぶ機会が多いという

特徴を活用することで、看護学基礎教育において効果的な社会人基礎力の育成が可能なのではないかと考えられる。

II 研究目的

看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し、属性による社会人基礎力の相違を検討することである。

III 用語の定義

本稿では、「社会人基礎力」は、職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力で、看護師の組織社会化、職場適応を促進し、看護実践の基盤となる能力とする。

IV 方法

1. 調査方法

1) 研究対象者

近畿・東海地方にある看護系学部、学科を有する4年制大学の中から便宜的標本抽出法により選出した11大学のうち、調査協力の同意を得られた看護系大学8校の看護学の実習経験のない1年次生と看護学の実習経験を積んだ4年次生を対象とした。

2) データ収集法

社会人基礎力を問う36項目および基本属性について自己記入式質問紙による調査を行った。質問紙の配布は当該学年の学生の集まる講義室にて文書と口頭による説明のうえ配布した。回収は留置式回収箱への個別投函、もしくは郵送法とし、質問紙の投函をもって研究への同意を得たとみなした。データ収集時期は、1年次生は入学後3～4ヶ月経過した2009年6月から7月、4年次生は臨地実習終了後の調査とし、質問紙回収は2009年10月末を最終として質問紙調査を実施した。

2. 測定内容

本研究における社会人基礎力を問う36項目は、経済産業省が提示しているプログレスシートの36項目を参考に独自に作成した(経済産業省編著, 2008)。質問項目の作成にあたり、経済産業省社会人基礎力担当者より社会人基礎力の概念の使用について、使用方法、内容のアレンジを含む自由な使用の許諾を得た。質問項目は看護学基礎教育

の経験を有する8名の専門家によって文章表現、内容の妥当性を検討された。プログレスシートは形成的評価を目的とした3段階評価形式をとっているが、数量的評価を目的とした本質問紙においては能力差をより鮮明に確認できるよう6段階リッカートスケールとし、グループやチームでの取り組みをするときの自分を思い出して回答するように指示文を加えた。

3. 分析方法

対象者の学年、性別、年齢、社会人としての就労経験、一人暮らしの経験、結婚経験について、度数分布と正規性の確認を行った。

社会人基礎力を問う36項目の度数分布と記述統計量の確認、正規性の検定、平均値と標準偏差の算出による天井効果、フロア効果の確認、Cronbach's α 係数の確認を行った。項目分析で除外する項目がないことを確認の後、構造方程式モデリングによる確認的因子分析と多母集団同時分析を用い構成要素と構造の検討をした。属性による社会人基礎力の相違の検討はMann-WhitneyのU検定を用いた。分析には統計ソフトSPSS17.0, Amos17.0 for Windowsを使用した。

4. 倫理的配慮

学生には研究の目的、意義、方法、研究参加の自由意思の尊重と不参加でも不利益のないことの保証、目的外のデータ使用はしないこと等について文書と口頭で説明した。個人が特定できるデータは扱わず、統計的に処理し、管理には細心の注意を払った。なお、この研究は大阪府立大学看護学部倫理委員会の審査により承認を受け開始した(申請番号21-2, 21-61)。

V. 結果

1. 質問紙の回収状況と対象者の属性

質問紙は1043名に配布し、758名から回答を得た(回収率72.7%)。そのうち欠損値のあるもの95名(欠損率13.1%)と、履修学年が対象外の者13名を除外し650名から有効回答を得た(有効回答率85.8%)。有効回答者は1年次生355名(54.6%)、4年次生295名(45.4%)であった。男性44名(6.8%)、女性606名(93.2%)、年齢は18歳から43歳、平均 20.56 ± 3.46 (Mean \pm SD) 歳であった。社会人としての就労経験があると回答した者が42名(6.5%)、社会人としての就労経験のない者は608(93.5%)名であった。

有効回答650名の社会人基礎力のアクション、シンキング、チームワークの合計得点（以後、社会人基礎力合計得点とする）は正規性を示すと考えられた（Shapiro-Wilk検定、 $P>0.05$ ）。Mann-WhitneyのU検定は社会人基礎力合計得点、および社会人基礎力の下位尺度レベルのアクション、シンキング、チームワークのすべてにおいて社会人としての経験のある群の平均ランクが高く、有意差を確認した（表1）。社会人としての就労経験は看護系大学生の社会人基礎力に影響を及ぼすと考えられ、以下の分析では社会人としての就労経験がないと回答した608名を対象とした。

社会人としての就労経験のない608名は1年次生338名（55.6%）、4年次生270名（44.4%）、男性39名（6.4%）、女性569名（93.6%）、年齢は18歳から28歳、平均 19.9 ± 1.9 （Mean \pm SD）歳であった。一人暮らし経験のある学生186名（30.6%）、一人暮らし経験のない学生422名（69.4%）、未婚の学生601名（98.8%）、既婚の学生7名（1.2%）であった。

2. 社会人基礎力の構成要素

1) 社会人基礎力を問う36項目の項目分析

就労経験のない608名の社会人基礎力合計得点はShapiro-Wilk検定により正規分布を認めると考えられ、平均値を中心として低得点から高得点に渡る偏りのないデータであることを示した。平均値と標準偏差を計算し、天井効果およびフロア効果の見られる項目はないことを確認した。

36項目のCronbach's α 係数は0.94、3項目からなる12の能力要素ごとのCronbach's α 係数は0.86から0.60であった（表2）。修正済み項目合計相関は0.65から0.35の正の相関を示した。項目が削除された場合のCronbach's α 係数を36項目のCronbach's α 係数と比較しても大きな変化はみられなかった。

2) 社会人基礎力の構成要素の検討

(1) 3次因子分析モデルによる確認的因子分析
看護系大学生における社会人基礎力について、観測変数に社会人基礎力を問う36の質問項目を投入し、従属変数には経済産業省の定義に基づく3分類12能力要素で構成した3次因子分析モデルを作成し、モデルの適合度の検討を行った（図1）。

このモデルの係数の推定値は全て有意を示し、適合度指標はGFI=0.873, AGFI=0.853, CFI=0.906, RMSEA=0.052であった。GFI, AGFI, CFIは0.900以上であれば説明力のあるパス図であると判断し、変数が30以上のパス図の場合は、GFIが0.900を超えていなくてもGFIの低さの理由だけでそのパス図を捨てる必要はないと言われている（豊田, 2008）。RMSEAは0.050以下であれば当てはまりが良く、0.100以上であれば当てはまりが良くないと判断し（Brownら, 1993; 豊田, 2008）、0.080以下であれば適合度は高いとされている（山本, 2002）。3分類と12の能力要素からなる従属変数の決定係数は0.92から0.47であった。

以上のことから、経済産業省の定義に基づくこの3次因子分析モデルはデータに対し良好な当てはまりを示しており、社会人基礎力の構成要素は3分類12能力要素から構成される一つのまとまりであることが示された。

(2) 多母集団同時分析

属性によるMann-WhitneyのU検定で3分類のレベルで有意差のあった学年と性別に着目し、それぞれ等値制約を置かない多母集団同時分析による、モデルの局所的な集団の異質性の検討を試みた。等値制約を置かないとは、集団間でパス図は一緒でも、推定値はそれぞれ異なってもよいという配置不変性と呼ばれる仮説を表現するものである（豊田, 2008）。3次因子分析モデルによる多母集団同時分析は変数が多くモデルが複雑となるため、社会人基礎力の下位尺度合計得点を観測変数とした下位尺度合計得点モデルを作成し

表1 社会人経験の有無による看護系大学生の社会人基礎力の差 N=650

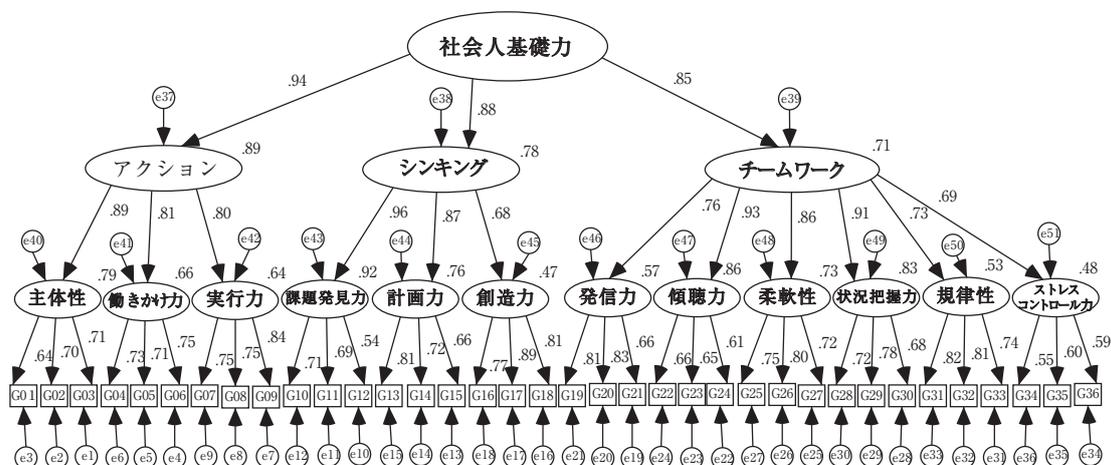
	社会人経験あり					社会人経験なし					有意差
	N	中央値	最小値	最大値	平均ランク	N	中央値	最小値	最大値	平均ランク	
アクション	42	37.00	27	54	407.24	608	35.02	15	53	319.85	**
シンキング	42	35.00	22	46	404.96	608	32.50	13	51	320.01	**
チームワーク	42	79.00	56	102	397.60	608	74.96	43	107	320.52	*
社会人基礎力合計得点	42	151.00	110	196	414.56	608	142.48	86	197	319.35	**

Mann-Whitney の U検定による

* $P<.05$ ** $P<.01$

表2 看護系大学生の社会人基礎力を問う36項目の信頼性係数

3分類	12能力要素	項目	12能力要素ごとα	36項目α
アクション	主体性	01.グループでの取り組みで、自分の役割は何かを見極めている	.72	
		02.困難なことでも自分の強みを生かして取り組んでいる		
		03.自分の役割や課題に対して自発的・自律的に行動している		
	働きかけ力	04.メンバーの協力を得るために、協力の必要性や目的を伝えている	.78	
		05.状況に応じて効果的な協力を得るために、様々な手段を活用している		
		06.グループの目標を達成するために積極的にメンバーに働きかけている		
実行力	07.目標達成に向かって粘り強く取り組み続けている	.82		
	08.とにかくやってみようとする果敢さを持って課題に取り組んでいる			
	09.困難な状況から逃げずに目標に向かって取り組み続けている			
シンキング	課題発見力	10.目標達成のために現段階での課題を的確に把握している	.67	
		11.現状を正しく認識するための情報収集や分析をしている		
		12.課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求めている		
	計画力	13.目標達成までのプロセスを明確化し、実現性の高い計画を立てている	.77	
		14.目標達成までの計画と実際の進み具合の違いに留意している		
		15.計画の進み具合や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正している		
創造力	16.複数のもの・考え方・技術等を組み合わせ、新しいものを作り出している	.86		
	17.従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出している			
	18.目標達成を意識し、新しいものを生み出すためのヒントを探している			
チームワーク	発信力	19.グループでの取り組みで、メンバーに情報をわかりやすく伝えている	.80	.94
		20.メンバーがどのような情報を求めているかを理解して伝えている		
		21.話そうとすることを自分なりに理解したうえでメンバーに伝えている		
	傾聴力	22.内容の確認や質問等を行いながら、メンバーの意見を理解している	.67	
		23.相槌や共感等により、メンバーに話しやすい状況を作っている		
		24.先入観や思い込みをせずに、メンバーの話の話を聞いている		
柔軟性	25.自分の意見を持ちながら、メンバーの意見も共感を持って受け入れている	.80		
	26.なぜそのように考えるのか、メンバーの気持ちになって理解している			
	27.立場の異なるメンバーの背景や事情を理解している			
状況把握力	28.周囲から期待されている自分の役割を把握して、行動している	.76		
	29.自分にできること・他のメンバーができることを判断して行動している			
	30.周囲の人間関係や忙しさを把握し、状況に配慮した行動をとっている			
規律性	31.メンバーに迷惑をかけないように、ルールや約束・マナーを理解している	.83		
	32.メンバーに迷惑をかけたとき、適切な事後の対応をしている			
	33.規律や礼儀が求められる場面では、礼節を守ったふるまいをしている			
ストレスコントロール力	34.グループでの取り組みでストレスを感じる時、その原因について考えている	.60		
	35.人に相談したり、支援を受けたりして、ストレスを緩和している			
	36.ストレスを感じても、考え方を切り替え、コントロールしている			



(標準化推定値), N=608, e: 誤差変数, G1~G36: 社会人基礎力を問う質問項目
GFI=.873, AGFI=.853, CFI=.906, RMSEA=.052

図1 看護系大学生の社会人基礎力の3次因子分析モデル

た。このモデルでは潜在変数に共分散を置く確認的因子分析モデルを採択し、潜在変数の分散を1に固定することによってすべてのパスの差の検討が可能とした。

① 下位尺度合計得点モデル

はじめに下位尺度合計得点モデルに1年次生と4年次生のデータを全て投入しモデルへの適合度を確認した。パスの推定値は全て有意を示しており適合度指標はGFI=0.946, AGFI=0.917, CFI=0.952, RMSEA = 0.072であったことから、データのモデルに対する当てはまりは良好であると判断されたため多母集団同時分析を実施した。

② 学年の相違による社会人基礎力の検討

学年の相違による多母集団同時分析では、適合度指標はGFI=0.930, AGFI=0.892, CFI=0.946, RMSEA = 0.054であった(図2, 図3)。潜在変

数から観測変数へのパスの影響の強さについて、1年次生と4年次生の学年間で差を求めた統計検定量の絶対値が1.96以上のものは認められず、有意差があるとはいえないことが示された。これは学年の相違による局所的な集団の異質性があるとはいえないことを示している(表3)。

③ 性別による社会人基礎力の検討

性別による多母集団同時分析の適合度指標はGFI=0.926, AGFI=0.886, CFI=0.939, RMSEA = 0.058であった(図4, 図5)。潜在変数から観測変数へのパスの影響の強さについて、性別で差を求めた統計検定量の絶対値が1.96以上のものはなく、有意差はあるとはいえないことが認められた。これは性別による局所的な集団の異質性があるとはいえないことを示している(表4)。

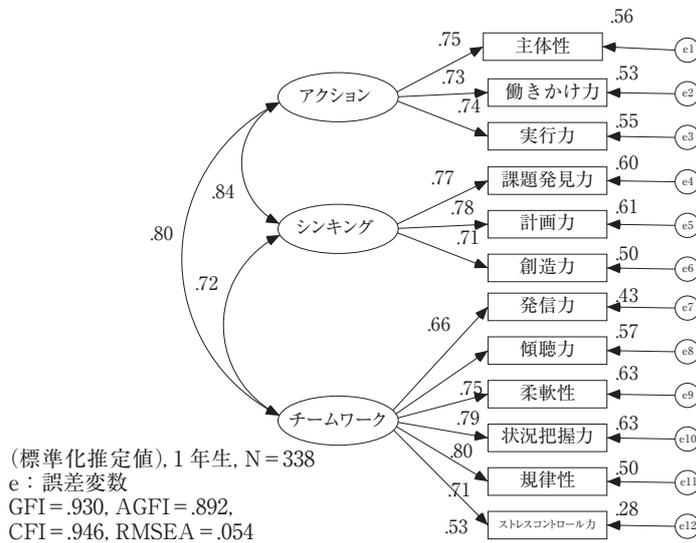


図2 看護系大学生の社会人基礎力の学年間での多母集団同時分析(1年生)

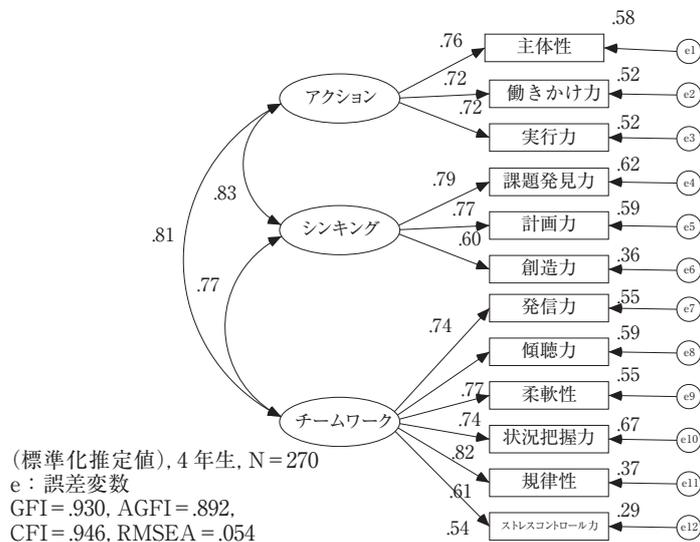


図3 看護系大学生の社会人基礎力の学年間での多母集団同時分析(4年生)

表3 看護系大学生の社会人基礎力の学年間でのパスの影響の強さの差

	1年生				4年生				学年間のパスの影響の強さの差に対する検定統計量
	推定値	標準誤差	検定統計量	確率	推定値	標準誤差	検定統計量	確率	
主体性 <--- アクション	1.58	0.10	15.11	***	1.53	0.11	13.65	***	-0.33
働きかけ力 <--- アクション	1.57	0.11	14.57	***	1.76	0.14	12.66	***	1.05
実行力 <--- アクション	1.67	0.11	14.77	***	1.75	0.14	12.72	***	0.43
課題発見力 <--- シンキング	1.66	0.11	15.65	***	1.68	0.12	14.25	***	0.09
計画力 <--- シンキング	1.77	0.11	15.91	***	1.71	0.13	13.67	***	-0.39
創造力 <--- シンキング	1.79	0.13	13.94	***	1.50	0.15	10.10	***	-1.48
発信力 <--- チームワーク	1.44	0.11	12.93	***	1.73	0.13	13.73	***	1.76
傾聴力 <--- チームワーク	1.49	0.10	15.59	***	1.48	0.10	14.35	***	-0.05
柔軟性 <--- チームワーク	1.72	0.10	16.73	***	1.65	0.12	13.66	***	-0.46
状況把握力 <--- チームワーク	1.72	0.10	16.86	***	1.75	0.11	15.78	***	0.19
規律性 <--- チームワーク	1.63	0.11	14.22	***	1.33	0.13	10.48	***	-1.71
ストレスコントロール力 <--- チームワーク	1.40	0.14	9.87	***	1.25	0.14	9.12	***	-0.79
アクション <--> シンキング	0.84	0.03	25.08	***	0.83	0.04	20.73	***	-0.19
シンキング <--> チームワーク	0.72	0.04	19.00	***	0.77	0.04	19.46	***	0.89
アクション <--> チームワーク	0.80	0.03	24.52	***	0.81	0.04	22.15	***	0.10

*** P<.001

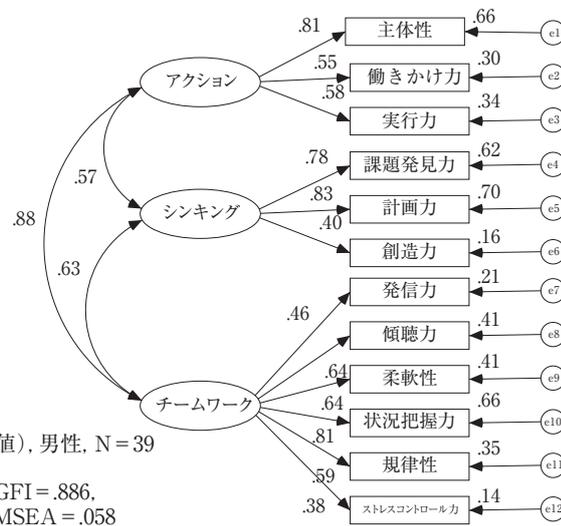


図4 看護系大学生の社会人基礎力の性別での多母集団同時分析 (男性)

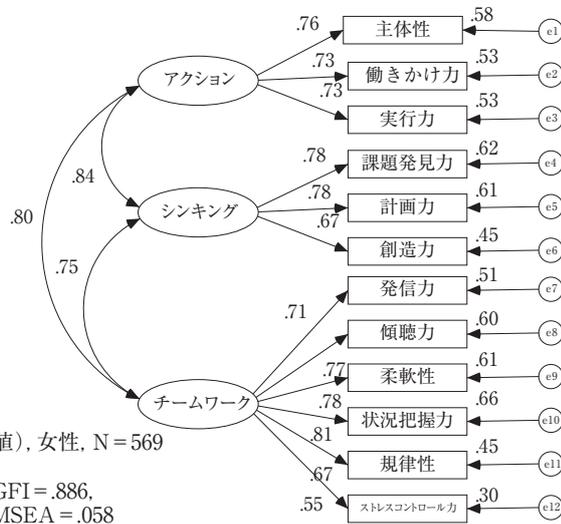


図5 看護系大学生の社会人基礎力の性別での多母集団同時分析 (女性)

表4 看護系大学生の社会人基礎力の性別でのパスの影響の強さの差

	男性				女性				性別でのパスの影響 の強さの差に対する 検定統計量
	推定値	標準誤差	検定統計量	確率	推定値	標準誤差	検定統計量	確率	
	主体性 <--- アクション	1.88	0.35	5.31	***	1.55	0.08	19.83	
働きかけ力 <--- アクション	1.28	0.38	3.39	***	1.67	0.09	18.83	***	1.02
実行力 <--- アクション	1.35	0.38	3.60	***	1.70	0.09	18.76	***	0.91
課題発見力 <--- シンキング	1.73	0.35	4.98	***	1.69	0.08	20.70	***	-0.11
計画力 <--- シンキング	2.14	0.40	5.32	***	1.75	0.09	20.64	***	-0.95
創造力 <--- シンキング	1.07	0.45	2.38	0.017	1.66	0.10	16.75	***	1.28
発信力 <--- チームワーク	1.09	0.38	2.84	0.005	1.61	0.09	18.79	***	1.32
傾聴力 <--- チームワーク	1.11	0.27	4.19	***	1.54	0.07	21.01	***	1.56
柔軟性 <--- チームワーク	1.40	0.33	4.20	***	1.73	0.08	21.42	***	0.97
状況把握力 <--- チームワーク	1.99	0.35	5.72	***	1.73	0.08	22.60	***	-0.73
規律性 <--- チームワーク	1.44	0.38	3.76	***	1.51	0.09	17.28	***	0.18
ストレスコントロール力 <--- チームワーク	0.99	0.44	2.26	0.024	1.40	0.10	13.58	***	0.91
アクション <--> シンキング	0.57	0.16	3.52	***	0.84	0.03	31.76	***	1.62
シンキング <--> チームワーク	0.63	0.14	4.48	***	0.75	0.03	27.35	***	0.88
アクション <--> チームワーク	0.88	0.10	8.41	***	0.80	0.03	31.34	***	-0.76

*** P<.001

3. 属性による社会人基礎力の相違の検討

学年, 性別, 一人暮らしの経験の有無, 結婚の経験の有無による社会人基礎力の相違について, Mann-WhitneyのU検定を用いて検討した。

学年の比較では, 平均ランクは4年次生が1年次生よりアクション, シンキング, チームワークにおいて上回ったが, 有意差が認められたのはシンキングとチームワークであった(表5)。

性別の比較では, 平均ランクはアクション, シンキング, チームワークにおいて男性が上回り, 有意差が認められたのはアクションとシンキングであった(表6)。

一人暮らし経験の有無, 結婚の経験の有無の比

較では3分類レベルでの有意差は認められなかった。

VI. 考察

本研究の目的は, 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素を確認し, 属性による社会人基礎力の相違を検討することであった。看護系大学生にとって社会人基礎力とは, 大学生に広く普遍的に求められる汎用的な態度・技能(Generic Skills)の一部であり, その中でも地域や職場で多様な人々とともに働くために必要なコミュニケーション能力の要素が強いと考えられる。また, 本研究

表5 学年による看護系大学生の社会人基礎力の差

	N=608										
	1年生					4年生					有意差
	N	中央値	最小値	最大値	平均ランク	N	中央値	最小値	最大値	平均ランク	
アクション	338	35	15	51	298.88	270	36	15	53	311.54	n.s.
シンキング	338	32	13	51	290.05	270	33	13	50	322.59	*
チームワーク	338	73	44	107	276.05	270	77	43	104	340.12	***
社会人基礎力 合計得点	338	139	87	191	281.31	270	145	86	197	333.54	***

Mann-Whitney のU検定による

* P<.05 *** P<.001 n.s.:not significant

表6 性別による看護系大学生の社会人基礎力の差

	N=608										
	男性					女性					有意差
	N	中央値	最小値	最大値	平均ランク	N	中央値	最小値	最大値	平均ランク	
アクション	39	37	19	49	373.63	569	35	15	53	299.76	*
シンキング	39	34	19	43	362.21	569	32	13	51	300.54	*
チームワーク	39	78	54	94	336.90	569	74	43	107	302.28	n.s.
社会人基礎力 合計得点	39	149	101	186	358.47	569	142	86	197	300.80	*

Mann-Whitney のU検定による

* P<.05 n.s.:not significant

では社会人基礎力を看護師の組織社会化，職場適応を促進し，看護実践の基盤となる能力と考え定義している。さらに新人期は専門職社会化のプロセスの初期段階であり，社会人基礎力は看護専門職の職業発達にも影響すると考えられ，教育・研究と実践との間の共通言語として臨地実習指導や継続教育への活用を期待するものである。

1. 社会人基礎力の構成要素について

有効回答を得た650名の社会人経験の有無によるMann-WhitneyのU検定は社会人基礎力合計得点，下位尺度レベルのアクション，シンキング，チームワークのすべてに有意差を示した。この結果から社会人基礎力を問う36項目は既知グループ法による構成概念妥当性を有すると考えられ，社会人としての就労経験の有無による能力の差を明らかにする弁別性があると認められた。この結果から社会人基礎力は何らかの経験を積むことにより伸長する性質を持ち，社会人としての就労経験により伸長することが確認された。

社会人基礎力合計得点は尖度，歪度ともに著しい偏りのない正規分布を呈し，構造方程式モデリングによる確認的因子分析に活用することのできる適切なデータであることを示した。項目分析では，天井効果とフロア効果はみられなかった。ストレスコントロール力の内的整合性は他の能力要素と比較すると低値であったが，削除しても尺度全体のCronbach's α 係数に大きな変化はみられなかった。内的整合性の低下は，ストレスコントロール力の質問項目には，「グループの取り組みでストレスを感じる時，その原因について考える」，「ストレスを感じても，考え方を切り替え，コントロールしている」という自己の内面で思考する方向性と，「人に相談したり，支援を受けたりして，ストレスを緩和している」という他者に相談する外向きの方向性という二つの相反する方向性の存在が原因となっている可能性が考えられる。看護師の職場ストレスへの対応は，同僚への相談，施設内の友人への相談が多く（一瀬ら，2007），ストレスコントロール力は看護系大学生の社会人基礎力を構成する上で重要な能力と考える。

3次因子分析モデルによる確認的因子分析は，良好な適合度を示していた。高次の因子分析モデルが成立すること自体が，個々の構成要素は一つ概念を表現することを示しており，これら36の項目は一つ概念に集約されるまとまりのある集合であると考えられる。社会人基礎力は企業への実態調査やヒアリングを参考に考案され，その

定義に基づくモデル構成で適切な適合度指標が得られた。したがって社会人基礎力36項目は，豊田（2008）が目指すべきモデルとして述べているような「実質科学的な知見に裏付けられており，多くの適合度指標において極端に悪い値をとらないようなバランスの取れたモデル」としての条件を満たしているといえる。

さらに，多母集団同時分析ではパラメータ間に有意差は見られず，モデルの局所的な集団の異質性は認められなかった。これは，社会人基礎力には学年と性別で社会人基礎力に差があることは認められたが，3分類から12能力要素への影響度の強弱には相違はないということを表している。このことから，今回得られたデータでは社会人基礎力は学年と性別という側面からの構造上の相違はみられず，これらの属性の違いに対応したモデル構成であると考えられる。

以上のことから，今回調査を行った看護系大学生の社会人基礎力は，アクション，シンキング，チームワークの3分類，その下位概念としての主体性，働きかけ力，実行力，課題発見力，計画力，創造力，発信力，傾聴力，柔軟性，状況把握力，規律性，ストレスコントロール力の12能力要素に従った3層構造で説明されるひとつのまとまりある概念であることが確認されたと考える。

2. 属性による社会人基礎力の相違の検討について

学年間の社会人基礎力の比較においては，シンキングとチームワークが4年次生のほうが高く有意差があり，性別ではアクションとシンキングが男性のほうが高く有意差がみられた。

学年間の有意差は，横断的デザインの研究であるため同一集団の学年進行に伴う能力の変化とは言えず，結果は異なる学年間での集団の異質性の検討にとどまる。しかし，看護学基礎教育は保健師助産師看護師学校養成所指定規則により教育内容が定められ（看護行政研究会，2010），基礎分野から専門基礎分野，専門分野，統合分野までの学習内容を積み上げていくというカリキュラム構成から考えても，大学教育における看護学の学習量は学年進行に伴い増加する。そのような看護学基礎教育の特徴から，社会人基礎力の学年間の有意差について学年進行に伴う増加による差ととらえることも可能であると考えられる。

山田（2009）の学部系統別の学習成果の報告によると，「保健その他」の学部で高ポイントを示したのは「人と協力しながらものごとを進める」，

「自分で目標を設定し、計画的に行動する」であった。看護学基礎教育においては、自律した看護専門職の育成にあたり、エビデンスに基づいた系統的な問題解決能力とクリティカルシンキング、他職種との連携やチーム医療をキーワードとしたチームワークの重要性が言われている（看護学教育の在り方に関する検討会，2004；看護学基礎教育のあり方に関する懇談会，2008）。これらの能力は看護学実習において育成される機会が多く、実習の経験量は1年次生と4年次生では最も差がある。4年次生の社会人基礎力のシンキングとチームワークが1年次生を上回っていたのは、単に学年間の差異ではなく、看護学基礎教育における実習経験の影響を受けた学習成果と考えられる。

学年間の比較でアクションに有意差は見られなかった。1年生のアクションの平均ランクは298.88と3分類の中で最も高く、4年生のアクションの平均ランクも伸長していたが有意な差とはならなかった可能性などが考えられる。今回対象とした看護系大学1年生はもともとアクションが高く、主体性、働きかけ力、実行力を備えている学生が多いという可能性が考えられるが、看護系大学生の特徴は他学部生との比較により明らかにする必要があると考える。

性別による社会人基礎力の差については3分類とも男性のほうが高値を示しており、有意差はアクションとシンキングに認められた。高井(2007)は、大学生から老年期の男女を対象とした調査で、失敗を恐れる気持ちや失敗したことをくよくよ考えるといった「失敗懸念」の傾向は男性よりも女性のほうが強く、失敗懸念の姿勢は青年期に最も強いことを報告している。アクションは困難なことにもチャレンジ精神を発揮し果敢に取り組もうとする力であり、女性の失敗を恐れる気持ちがチャレンジ精神を抑制し、アクションを低下させるものと考えられる。加藤(1999)は、大学生、専門学校生、大学院生への調査でストレスの原因となっている問題に対して計画的、冷静に行動するという対処行動である課題優先コーピングは男性が女性より有意に高かったと述べている。シンキングは目標達成のために課題を的確に分析し計画的に新しい発想を生み出そうとする力である。男性の計画的で冷静な行動は、男性のシンキングが女性より有意に高かったことに影響を及ぼしていると考えられる。相原(2009)は日米の大学生に共通する傾向として、実際には女子学生のほうが成績はよく進学意欲も高いにもかかわらず、男子学生は自己評価が高く、女子学生は自己評価が

低い傾向があり、さらに日本の女子学生は男子学生よりも人間関係に価値意識を高く持っていると述べている。本研究において、女性のアクションとシンキングが男性より低値であったことは女子学生の低い自己評価の影響によるものと考えられ、チームワークに有意差が無かったことは女子学生の人間関係への高い価値意識によるものと考えられることもできる。したがって今回の調査における男女差については日本の大学生の自己評価の傾向に影響された可能性は否定できない。

いずれにしても、看護系大学の学生の約9割は女子学生が占めており（看護協会出版会，2009）、学生は実習においてストレスや不安を抱えており自己効力感を感じにくい状況にある（伊藤ら，2010）。学年間でアクションに有意差が無かったことと、女性のアクションが低かったことには実習経験の関与も推測される。学生の自信や自己効力感を支える教育的アプローチにより、アクションとシンキングに見られるような主体的に前に踏み出す姿勢や、問題解決に向けて考え抜く姿勢を伸長することが可能になると考える。

一人暮らしや結婚の経験の有無は、社会人基礎力に差を与える可能性があると考え属性として質問項目に加えたが、3分類レベルでの有意差は今回のデータからは認められなかった。社会人基礎力を問う36項目はグループでの取り組みにおける自己の行動を質問しているため、個人的な経験の有無は差に反映されなかったのではないかと考えられる。このことから社会人基礎力を問う36項目は「多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」という定義の反映された質問項目であると考えられる。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究は、先述のとおり横断的デザインという限界があり、また社会人基礎力を伸長させる関連要因についても明らかになっていない。一般大学生のPBLや実践型インターンシップにみられる効果が看護学基礎教育に特徴的な臨地実習でも同様にみられるのではないかと、看護学基礎教育における社会人基礎力育成の可能性についても具体的には言及できていない。実習の量と質が社会人基礎力に与える影響についてさらに詳細な調査に基づく分析が必要である。また、組織参入後の看護職と学生との比較、あるいは他学部の大学生との比較による看護系大学生の社会人基礎力の特徴の明確化は、看護学基礎教育への新たな示唆を与えるものとなると思う。

VII. 結論

社会人基礎力の構成要素について経済産業省が提示する概念に基づいて確認的因子分析を行い、実質科学的な知見に裏付けられた3次因子分析モデルは良好な適合度を示した。社会人基礎力は「アクション」、「シンキング」、「チームワーク」の3つの分類と、その下位概念である「主体性」、「働きかけ力」、「実行力」、「課題発見力」、「計画力」、「創造力」、「発信力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」、「ストレスコントロール力」の12能力要素から構成されることが確認された。学年と性別の違いでの多母集団同時分析では、集団の局所的な異質性は認められなかった。

社会人基礎力は1年次生よりも4年次生のほうが高く、シンキングとチームワークに有意差があった。これは看護学基礎教育の学習成果であると考えられ、看護学基礎教育における問題解決能力やチームワークの育成に重点を置く特徴は、社会人基礎力の伸長に対し影響を及ぼすと考えられる。

謝辞

本研究の調査にご協力いただいた学生の皆様、大学関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は、平成21年度大阪府立大学大学院看護学研究科博士前期課程に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

文献

- 相原総一郎 (2009) : 大学教育のジェンダー効果—日米の大学調査の比較から。山田礼子, 大学教育を科学する—学生の教育評価の国際比較, 84-100, 東信堂, 東京。
- Browne, M. W., Cudeck, R. (1993) : Alternative ways of assessing model fit, In K.A. Bollen & J. S. Long (Eds.), *Testing structural equation models*. 136-162, CA: SAGE Publications, Newbury Park.
- 中央教育審議会 (2008) : 学士課程教育の構築に向けて。文部科学省 (<http://www.mext.go.jp/bmenu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410/001.pdf>, 2010年9月閲覧)。
- Clayton, G. M., Broome, M. E., Ellis, L. A. (1989) : Relationship between a preceptorship experience and role socialization of graduate nurses. *J Nurs Educ*, 28 (2) , 72-5.
- 藤井文武, 平尾元彦 (2010) : 社会人基礎力を高める授業の実践—産学連携PBL授業「アクティブラーニング」の取組—。大学教育, 7, 23-34.
- 一瀬久美子, 堀江令子, 牟田典子, 他 (2007) : 看護師が抱える職場ストレスとその対応。保健学研究, 20 (1) , 67-74.

- 伊藤ももこ, 新井清美, 竹内久美子, 他 (2010) : 臨地実習が看護学生の心理状況に及ぼす影響。健康科学研究, 3, 67-73.
- 丸丸勇士, 伊藤安浩, 大森美枝子, 他 (2006) : 児童生徒や学生の生活体験不足と今後の実践的課題—体験の調査を通して—。日本生活体験学習学会誌, 6, 29-42.
- 神谷栄治, 西原美貴 (2000) : 学生相談における精神病近縁圏とのかかわり。 *Journal of Sugiyama Jogakuen University Humanities*, 31, 69-76.
- 看護学教育の在り方に関する検討会 (2004) : 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標 (看護学教育の在り方に関する検討会報告)。文部科学省, (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm, 2010年9月閲覧)。
- 看護行政研究会編 (2010) : 看護六法平成22年度版。新日本法規出版, 東京。
- 看護基礎教育のあり方に関する懇談会 (2008) : 看護基礎教育のあり方に関する懇談会論点整理。厚生労働省, (<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/07/s0731-8.html>, 2010年9月閲覧)。
- 看護協会出版会 (2010) : 平成21年看護関係統計資料集。看護協会出版会, 東京。
- 加藤知可子 (1999) : コーピングにおける性差。広島県立保健福祉短期大学紀要, 4(1), 13-16.
- 勝原裕美子, ウィリアムソン彰子, 尾形真実也 (2005) : 新人看護師のリアリティショックの実態と類型化の試み—看護学生から看護師への移行プロセスにおける二時点調査から—。日本看護管理学会誌, 9(1), 30-37.
- 経済産業省編著 (2008) : 今日から始める社会人基礎力の育成と評価。角川学芸出版, 東京。
- 水田真由美, 坂上良子, 辻幸代, 他 (2004) : 新卒看護師の精神健康度と離職願望。和歌山県立医科大学看護短期大学部紀要, 7, 21-27.
- 内閣府 (2007) : 平成19年度版国民生活白書—つながりが築く豊かな国民生活—。時事画報社, 東京。
- Rychen, D. S., Salganik, L. H. (2003) : *Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society*. Hogrefe & Huber Pub, Cambridge. / 立田慶裕 監訳 (2006) : キー・コンピテンシー—国際標準の学力を目指して—。明石書店, 東京。
- 佐居由美, 松居美和子, 平林優子, 他 (2007) : 新卒看護師のリアリティショックの構造と教育プログラムのあり方。聖路加看護学会誌, 11(1), 100-108.
- 社会人基礎力に関する研究会 (2006) : 中間取りまとめ。経済産業省 (<http://www.meti.go.jp/press/20060208001/shakaijinkisoryoku-honbun-set.pdf>, 2010年9月閲覧)。
- 高橋弘司 (1993) : 組織社会化研究をめぐる諸問題。経済行動科学, 8(1), 1-22.
- 高井範子 (2007) : 青年期および成人期における忍耐力と失敗懸念に関する研究。太成学院大学紀要, 9, 31-40.
- 富樫敦, 山田智子, 庄子栄光, 他 (2008) : 産学官連携による社会人基礎力育成・評価事業—宮城大学モデル「人材の地産地消」地域で育てた人材を地域で活かす—。電子情報通信学会技術研究報告, 108(185), 31-36.
- 豊田秀樹 (2008) : 共分散構造分析—Amos編, 東京図書, 東京。
- 山田剛史 (2009) : 大学での学習—大学での学習成果 (大学生の学習・生活実態調報告書)。研究所報, 51, 100-106, ベネッセコーポレーション。
- 山本嘉一郎 (2002) : Amosによる共分散構造分析と解析事例 (第2版)。ナカニシヤ出版, 京都。

